

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02572

研究課題名（和文）日英大学入試改革における公正なアクセスと機会の拡大をめぐる論理と方策

研究課題名（英文）The Logic and Strategies for Fair Access and Widening Participation in Admission Reform in the UK and Japan

研究代表者

沖 清豪（Oki, Kiyotake）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70267433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2010年代以降イギリスで進められた大学入学試験改革において、公正なアクセスのあり方(fair access)と多様な背景を有する人々の高等教育への参加(widening participation)をめぐる改革について検証した。その結果、国レベルでアクセス拡大のための試験制度改革が検討されていること、また「社会的背景に基づく選抜」が個々の大学の政策に応じて展開されていること等が明らかとなった。一方、データからは社会経済的格差による進学率改善は十分進んでいない一方、30歳以上の成人学生が増加に転じており、この点での入学者層の多様化は進んでいることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、2020年代のイギリス入学者選抜制度の改革状況や今後の展望を明らかにしたこと、特にPQAをめぐる議論を整理したこと、一方で公正性や参加の多様化を確認する指標では十分な改善が図れていないことを指摘できたことが挙げられる。一方社会的意義については、イギリスの入学者選抜において公正性を担保するための諸原則について日本に紹介し、日本での今後の議論の参考資料を提供できたこと、また公開シンポジウムの開催を通じて、関連する諸知見を他領域の研究者や一般社会に対して提供できたことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the reforms related to fair access and the widening participation of people from diverse backgrounds in higher education that have been promoted in the UK university entrance examination system since the 2010s. So, it was revealed that: (i) examination system reforms aimed at expanding access are being proposed and considered at the national level, (ii) "contextual admissions" is introduced according to the policies of individual universities, and (iii) on the other hand, troubles that raise doubts about fairness have also emerged. And the data revealed that while improvements in progression rates due to socioeconomic disparities have not advanced sufficiently, there has been an increase in adult students aged 30 and above, indicating progress in diversifying the demographic composition of entrants in this regard.

研究分野：教育制度論

キーワード：公正なアクセス 多様な学生の確保 GCE Aレベル試験 社会的背景に基づく選抜 イギリス

## 1. 研究開始当初の背景

2010年代は日本においては「高大接続改革」と呼ばれる改革がすすめられ、高校教育改革、大学教育改革と合わせて、両者をつなぐ入学者選抜の改革が進められた。その中では、学生の変容をめぐる議論とともに、医学部入学者選抜をめぐる入学者選抜の公正性が問われる事態が生じることとなった。日本の場合、この公正性は特に性別と年齢に着目したものとなる一方、大学入学共通テストの議論においては民間英語四技能試験の導入をめぐって経済的格差の問題も議論となっていた。

一方同時期においてイギリスでは、大学入学資格としての GCE A レベル試験をめぐる改革が進められていた。この点についてはすでに沖(2015)などで言及してきたが、その後の改革の中では、改めて公正なアクセス、すなわち試験制度の妥当性と学生の参加の拡大、すなわち多様な背景を有する学生の増加と呼ばれる課題が明確となっていることが確認された。

日本とイギリスは教育改革の狙いも、社会構造や歴史的背景も異なり、同じ文脈で議論されているわけではないことから、制度改革自体を参照することには慎重であるべきであるが、一方2010年代という時期においてなぜ入学者選抜の改革が目指されていたのか、その際に重視された公正性や進学率拡大に向けての公正性や多様化という議論はどのようなものであるのかは、相互に検証する意味があるように思われる。

こうした状況と認識を踏まえて、特にイギリスにおける入学者選抜改革で重視されたと思われる公正なアクセスと参加の多様化についての理解を深めることが必要であるという認識を踏まえて研究計画が立案された。

## 2. 研究の目的

本研究は2010年代に展開された日本の高大接続改革と並行してイギリスで進められた大学入学試験改革、いわゆる GCE A レベル試験制度をめぐる改革動向のうち、特に高等教育の機会に対する公正なアクセスのあり方(fair access)とそれを通じての多様な背景を有する人々の高等教育への参加(widening participation)をめぐる改革と成果について、歴史的背景を踏まえつつ各種の調査データに基づいて検討し、日本における高大接続改革、とりわけ公正に関する議論や改革提案への示唆を得ようとしたものである。

研究開始当初は2010年代の大学入学者選抜をめぐる日本とイギリスの改革動向を踏まえて、公正なアクセスと参加の多様化をめぐる状況や改善のための政策、およびその中等教育機関への影響を明らかにすることを目的としていた。

しかしながら、研究開始早々に COVID-19 の感染拡大により、特にイギリスにおいては大学入学者選抜試験としての GCE A レベル試験における学力試験が2年間にわたり中止となり、大学入学者選抜は中等教育機関自身の評価とその中での成績に基づく判定となった。そのため、成績評価自体のインフレが生じたともいわれていることから、研究計画後半では、日本における高大接続改革における課題を検討するとともに、イギリスにおける現状の把握だけでなく、公正なアクセスを担保するための政策がどのように転換しつつあるのかを、関連機関の提言や発表文書を通じて明らかにし、2020年代中盤以降の政策の展開可能性を確認することとした。

## 3. 研究の方法

本研究では COVID-19 の感染拡大により、必要なタイミングでのイギリス国内の教育機関等への訪問調査が実施できない事態となったため、基本的に以下の情報を収集することで、当初の調査目的を実現することを試みた。

- 1) 政府機関の入学者選抜改革をめぐる文書の収集と分析
- 2) 入学者選抜機関の報告書、および報道などを踏まえた COVID-19 の各種選抜試験への影響の検討
- 3) 大学ユニオンや研究機関による入学者選抜改革への提言、調査研究、および COVID-19 への対応策の情報収集と分析
- 4) 政府の統計データに基づく大学入学者の特性の検証

なお、2021年8月には、日英教育学会の会員や関連領域の研究者の協力を得て、本テーマを多様な観点から検討する公開シンポジウム「イギリス版「高大接続改革」を検証する：格差・公正・移行問題に注目して」を企画・司会として開催し、その報告を2022年の学会誌に掲載した。

## 4. 研究成果

### (1) イギリスにおける公正なアクセスの状況

公正なアクセスについては、2010年代から現在まで、政策文書や大学団体からの報告書、実

践コードが公表され、状況の把握と適切な対応方法の共有が進められていることが明らかとなった。一方で、COVID-19 の感染拡大によって大学入学者選抜における全英の資格試験である GCE A レベル試験が2年間にわたり実施されなかったことから、試験による公正なアクセス自体が議論されたい状況となっていた。

コロナの影響が減少した2021年度以降、以下の2点をめぐる議論が進んでいることが確認された。

1) 教育省は、過去20年にわたる GCE A レベル資格試験の改革および入学者選抜制度全体の改善が、結果的に選抜制度自体の複雑化を招き、情報格差が進学機会格差につながってしまう状況になっていることへの危機感に基づいて、2021年に試問文書を公表し、個別大学への出願のタイミングを従来通り GCE A レベル資格試験受験の前とするか、受験後成績が判明した時点で改めて出願先を決定する PQA (Post-Qualification Admissions) を導入すべきかについて意見を求めている。現在までこの議論は進展が見られないが、2020年代後半以降に改めて課題とみなされる可能性が残っている。

2) 従来から実施されてきた「社会的背景に基づく選抜 (contextual admission)」の拡大の是非については、各大学のポリシーに基づいた戦略立案により、困難な社会背景を有する志願者については、GCE A レベル試験ないし GCSE 試験など他の試験の成績として求める要件を、通常の志願者よりも下げることの是非が検討されている。公正なアクセスという面からは正当性が主張されている一方、学力の担保という面で課題が残っており、本制度自体の拡大は進んでいるとはいえない状況にあることが確認された。

3) 2010年代後半以降、GCE A レベル試験と GCSE 試験のいずれにおいても問題の漏洩事件が生じたことにより、改めて民間機関が公的な試験を実施するにあたっての情報管理の問題が課題となっている。また、一部大学が受験生に対して、確実に入学することを確約すれば「無条件合格」(unconditional offer)を出していたことも明らかになっており、いずれも個別事案ではあるものの公正性に関する疑念が指摘されていることも明らかとなった。

## (2) イギリスにおける参加の拡大の状況

参加の拡大については、沖(2019)で2017/18年度までの動向を確認しており、その後の動向について、英国統計局 (HESA) のデータで改めて状況を確認したところ、以下のような状況となっている。

1) 男女間での学生比率は大きな変動がなく、2021/22年度においても女性が57%、男性が43%のままである。

2) 学生の年齢層については、2017/18年度において20歳以下が41%まで上昇していたが、その後減少しており、2021/22年度では37%となっている。一方30歳以上の学生が2017/18年度にはじめて20%を割り込んだが、その後増加に転じており、2021/22年度には23%まで回復している。こうした変化については、英国内でも十分な背景の検討がなされておらず、学生数が増加を社会人学生が支えているという構造が明らかとなっている。

3) 障害を有すると申請している学生は毎年増加傾向にあり、2021/22年度には16%にまで達している。

4) 英国内で居住していた学生の人種・民族構成の変化については、表1の通りである。White が学生数自体は過去4年間で8%増加しているものの、学生全体の中で占める割合が74.5%から71.6%に減少する一方、他の人種・民族はいずれも増加傾向にある。

表1 2017/18年度から2021/22年度にかけての人種別進学者数の変化

Ethnicity	2017/18年度		2021/22年度		増加率 %
	合計	%	合計	%	
White	1,448,610	74.5%	1,563,145	71.6%	107.9%
Black or Black British	147,675	7.6%	171,620	7.9%	116.2%
Asian or Asian British	209,805	10.8%	264,665	12.1%	126.1%
その他 (Mixed, Other, Not known)	139,465	7.2%	183,140	8.4%	131.3%
合計	1,945,560	100.0%	2,182,560	100.0%	112.2%

出典：HESAデータより作成

5) 階層構造の指標としてイングランドで現在でも利用されている POLAR4 において、もっとも進学困難な地域からの高等教育機関進学者の比率は13%に留まっており、過去8年間において2%程度の改善にとどまっている。この数値は、もし格差が存在していなければ20%前後になるはずであり、依然として社会経済的に困難を抱えている地域からの高等教育機関への進学者には大きな障壁が残っており、参加の拡大に制約があり、公正なアクセスが十分実現されていないことを示唆するものとなっている。

## (3) COVID-19 がイギリス大学入学者選抜に与えた影響

大学入学者選抜試験としての GCE A レベル試験における学力試験が2年間にわたり中止となったことから、2020年度と2021年度入学者を対象とした大学入学者選抜においては、学校での学習状況や予期された段階別評価結果 (predicted grades) をアルゴリズムに基づいて算出し、その結果を大学進学希望者の成績として扱い、入学者選抜を実施している。その結果、2020年8月には評価を算定するアルゴリズムについて批判が生じた。

なお、2021年8月には段階別評価においてA\*やAといった高い評価を受けた受験生の比率が高くなり、評価の妥当性が改めて議論された。その後、2022年度入学者を対象としたGCE Aレベル試験が実施されたことにより、評価の妥当性の議論は沈静化し、この点での公正性についての議論はイギリス国内では進んでいないことが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 沖 清豪	4. 巻 69
2. 論文標題 イギリスにおける学生の苦情申し立て： COVID-19下での独立裁定局（OIA）の活動	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 151-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖 清豪	4. 巻 26
2. 論文標題 シュワルツ報告後の大学入学者選抜をめぐる議論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日英教育研究フォーラム	6. 最初と最後の頁 23 - 30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19021/juef.26.0_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖 清豪	4. 巻 67
2. 論文標題 COVID-19の影響下における イギリスの公正な大学入学者選抜改革	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖 清豪	4. 巻 66
2. 論文標題 中教審高大接続特別部会における入学者選抜制度改革議論の「揺らぎ」 -入試の公正性と共通テスト導入をめぐる議論に基づいて-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 151-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 沖 清豪
2. 発表標題 イギリスの大学における学生の苦情申し立て： COVID-19 下での独立裁定局(OIA)の役割
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 沖 清豪
2. 発表標題 シュワルツ報告後の大学入学者選抜をめぐる議論
3. 学会等名 日英教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沖 清豪
2. 発表標題 審議会資料による「隠れた」政策転換中央教育審議会高大接続特別部会を事例に
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------